頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
–アジア・アフリカ生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築–
報告書

現代アフリカにおける持続型生存基盤としての在来犁農耕の可能性

派遣者　：田中　利和
派遣期間：2015 年 2 月 10 日～2015 年 3 月 30 日　(48 日間)
派遣先　：アジスアベバ大学エチオピア研究所（エチオピア）

キーワード：犁農耕、牛耕、エチオピア中央高原、オロモ、農耕技術の変容

１．　研究課題について

現代のアフリカは人口増加とそれを賄う食料需用の増大という問題を抱えている。かぎられた土地のなかで、集約的かつ安定した農業の必要に直面していることは間違いない。アフリカの在来集約農業の一つとして、エチオピア中央高原に暮らすオロモの人びとが実践してきた、農法的に高度な発達段階にあると理解できる「牛耕」、つまり、ウシを用いた「犁農耕」について検討することは、現代アフリカ農民の持続型生存基盤を考察するうえで重要な課題であると考える。本研究では、人びとの生存基盤としての犁農耕の可能性について、実証的データを用いて総合的に明らかにすることを目的とする。その結果を他の地域での農業実践の事例と比較をすることで、その特性を理解し、有用性と応用の可能性について検証する。

２．　派遣の内容

2015 年 2 月 10 日から 2015 年 3 月 30 日までの 48 日間、エチオピアに渡航した。本派遣ではおもに、2015 年 2 月 6 日に京都でおこなわれた、本プログラムの最終国際ワークショップのセッション　”Ploughing in Africa: Is Animal Traction a Key Resource or a Bypassed Techonolog?” の成果を、調査地域の人びとと共有することがおもな目的であった。具体的には、ワークショップで論点となった、今後の調査地における畜力利用の有用性、なぜエチオピアで現在も畜力による犁耕が盛んにおこなわれているかなどについて、農民との意見共

有をしながら考察することが目的であった。

エチオピア国内で調査研究あるいは開発実践を進めている関係者との交流を継続的に実施することも渡航の目的であった。関係者を調査地に招待し、その感想を共有する機会をもうけることで、地域特有の生存基盤としての犁農耕を考察していくうえでのあらたな視点をえることができた。

３．　派遣中の印象に残った経験や体験

畜力利用は世界的にみても、工業生産される牽引機やモーターバイクなどの普及によって衰退しており、1990 年代にはイギリスでも盛んであった関連研究も、活発におこなわれることはなくなってきた。最終ワークショップでも、エチオピアの畜力利用の衰退は今後も進むという意見があった。しかし、本渡航ではそのような見方を覆すように、住民が畜力として馬の利用を今後も強化していこうとする新たなコミュニュティを見いだした。調査地においても、この 10 年で三輪のモーターバイクの普及などは凄まじく、馬車の現存数は減少してきている。そのような状況ではじまった、調査地域の 50 人からなる「馬主の集い」は、在来の馬の文化的な利用を地域で推進し保護するものであった。畜力利用に関する農民との議論のなかで、現状でも葬式や結婚式などの儀礼で一定数の馬が必要であり、当該地域の富と文化の豊かさを示す象徴として、不可欠の存在であると人びとは語る。この集いは、地域の馬を必要とする儀礼に関する情報を共有するのみならず、馬を事故や病気で亡くした場合にも、馬主にあらたな馬を供給し、馬をもたない人にも貸し出すという役割を担っている。以前には存在しなかった、このようなコミュニティが、単に牽引や輸送など畜力利用の実用面から派生したのではなく、儀礼に関する文化的側面にもとづき、出現したことは驚きであった。今後、犁農耕に関る畜力利用を考察する場合にも、実用面のみならず、畜力利用の文化的な側面も配慮しながら、彼らの実践に着目し、具体的にとらえていく必要性を感じた。

４．　目的の達成度や反省点

今回の派遣では、最終のワークショップで課題となった、アフリカにおける畜力利用の実態について、馬の文化的な畜力利用に関する新たなコミュニティとの出会いがあり、今後の犁農耕を考えていくうえでの具体的な分析視点を得られることができた。この点についてある程度の目的の達成はできたと考えて

いる。

派遣期間中は、当初の予定以上に調査地へ関係者を招くことができた。結果的に 6 組 11 名の研究者、開発実務家、企業の方、イギリス、アメリカ、日本の大学に所属する学生がフィールドを訪れ、最終ワークショップでの論点、地域農業の特徴、発展の可能性、フィールドワークの技法や作法などさまざまな点についての議論をおこなうことができた。特に家畜の飼養管理や発展に関する議論をつうじて、地域間の比較の視点の重要性を認識できたのみならず、短期間ではあるが、諸先輩方のフィールドを訪問する機会も得ることができたので、当初の予定以上の達成度はあると思っている。

５．　今後の派遣における課題と目標

今回は当初計画していた予定よりも、大きな収穫があった反面、調査地において、金銭をめぐってインフォーマントとの信頼関係を崩しかねない問題に直面した。これは、現場に腰をおちつかせて、時間をかけて調査や対話をおこなう従来のスタイルを維持できなかったことに起因すると判断できた。その後の対応をつうじてある程度問題の解決はできたものの、今後の調査にも影響を与えかねない状況のままで派遣は終わってしまった。根本的な解決と予防は今後の課題の一つである。

本プログラムの実施を機会として得られた知見や経験、そしてあらたに生まれてきた、生存基盤として犁農耕を考察していくための「畜力利用」の課題について、実証的データの収集は、今後不可欠である。継続的かつ持続的に、調査研究に取り組み、論文として公表していくことを今後の目標としたい。

写真１:馬の集いでの年長者による祝福の様子

写真２：馬の集いにあつまった馬主達

写真３：調査地に来訪していただいた、先輩の研究者と実務者の方々と